



マリー・キュリーの考えたこと

山内, 知也

(Citation)

小学図書館ニュース

(Issue Date)

2011-10-08

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001611>



小学図書館ニュース

ホームページ <http://www.schoolpress.co.jp/>

著作権法により、本紙の無断複写・転載は禁じられています。

平成23年
10月8日発行
第922号付録



★定期刊行物は終わる期間を予定しない刊行物です。年度が変わりましても、購読中止の申し出がない場合、引き続きご送付申し上げます。©少年写真新聞社 2011

マリー・キュリーの考えたこと

神戸大学大学院海事科学研究科 教授 山内知也

今からちょうど百年前、新しい元素であるラジウムとポロニウムとを発見した業績、そして、ラジウムとその化合物の性質を研究した業績に對して、マリー・キュリーにノーベル化学賞が贈られました。国際連合総会はこれを記念して今年を「世界化学年二〇一一」とし、世界各国で関連する行事が行われています。

もしもマリー・キュリーが
生きていたら

もしもマリー・キュリーが生きていたら、今般起きた福島第一原発事故に對してどのように振る舞ったでしょうか？ 私は、事故後直ちに研究者を組織し、航空機を含む最新の技術を使って、汚染マップを驚くような速さで作製し、放射能汚染に對する理解を助けたと思います。また地元自治体との交渉も買って出て、妊婦さんや子どもの被ばくを避けるために手を尽くしたでしょう。汚染牛肉が市場に出回りましたが、彼女が居たならば政府・国際機関を動かして、各自自治体・農協に放射線計測装置を完備し、事故の数週間後には彼女が校長を務める「放射線計測専門学校」から技能を身につけた生徒たちを輩出し、汚染拡大を防止させ

たでしょう。すなわち、自らが持つあらゆる知識を総動員して、放射線被ばくレベルの低減のために奔走したのではないかと私は思います。

プチット・キュリー
(移动式放射線治療装置)

一九一四年七月二十八日に第一次世界大戦が勃発しました。彼女は負傷兵の体内にひそむ銃弾や砲弾の破片のありかを透視できるX線装置を自動車に乗せることを発案し実現させます。彼女は役人と軍人を説得し、「使えない状態になつていなければ、きつとお返ししますから」と、友人にも車を提供してもらいました。自動車には発電機を搭載したので電気の無い前線でも使えました。これにはやがて「プチット・キュリー」というあだ名がつきます。マリーは二十台もの治療自動車とともに二百か所の放射線治療室を作り上げ、同時に専門学校を設立し、そこで働く放射線技師を育てました。そのような治療設備に助けられた負傷兵の数は、実に百万人を超えたと言われています。後に娘のイレヌスは母のこのような活動に直接協力します。多くの科学者が、毒ガスを含む兵器の研究に手を染めていたのとは大違いです。

ポーランド人として生きた女性科学者

先に「放射線被ばくレベルの低減のために奔走したのではないかと書いたのは、このような第一次世界大戦における彼女の振る舞いをみてそう思ったのです。この時、彼女はポーランドの家族の写真を肌身離さず持っていました。マリーの勝利はフランスの勝利にとどまるものではなく、ポーランドの勝利でもありました。この戦争によつてポーランドは百五十年にも及ぶ隷属状態から独立を取り戻したのです。マリーは遠い少女時代のことを思い出していました。中学生の身でありながらロシア皇帝の手先である役人に本心を見せずに、策をめぐらせてポーランドの歴史と言葉を守るためにがんばったこと、姉の学費を稼ぐため家庭教師として住み込みで働いていたシチューキで農民の子どもたちに読み書きを教えたこと、パリに学び母国に戻つて後進のために教師になることを自らの使命にしたことを。夫・ピエールの愛をも犠牲にしようとした愛国者としての夢が実現したのでした。マリーは第一次世界大戦を祖国ポーランドの解放戦争として「闘った」のだと思います。